



大鏡

六七



大鏡卷之第六目錄

中閔白
内大臣 道隆

栗田閔白
右大臣 道兼



東三条殿息



内大臣道隆

正應六年三月日病辞閣白
四月六日出家十日薨四十二

夫乃たこれ東三條にこれ一男あり清母ハ女院也
同族也関白よりさうく流ひて六年をくやね
まゝもん大疫癘乃年よりさう病させ給へり
乃やまひよりあるでぬもそのまゝに給ひり
一なりたのには上戸にさう乃奥の事よすま
ぬるハいそ不便なるありとてまや参乃くを御らん
て小一条大將因院たねと一車よりと業野より出させ
まひぬ鷹北のいおさかてはくめよはくせ給ひ興
あるのよねがてともすまもあまきいそて免
す今月をうもすまのすするりてはわさ給ひ

あはれどねどろろき泣くのぞいよて表の縁のすそを
あふりつふおつせ給ふありぞねどろろあ給ひさる
由申さるおつせあ給ふまじを血櫃かうぶかき給く
おつせよとらふいでくはくろむるごとくあつせ給ひ
字ありし給さるけりおつせとけりたけりし給ひ
をけりし給ひおつせ人のまじとあつせあつせきうを
それづこの殿乃由言はしおつせし給ひきうを
由申の由をとりしおつせし給ひし給ひし給ひし給ひ
御病^{御病}付てうせ給ひし給ひし給ひし給ひし給ひし
おつせ念佛^{念佛}申さ給ひし給ひし給ひし給ひし給ひし
あつせを^{あつせを}海^海時^時朝^朝光^光あつせし給ひし給ひし給ひし給ひし
や極^極致^致し給ひし給ひし給ひし給ひし給ひし

と給ひけりしとあつせし給ひし給ひし給ひし給ひし
かきし給ひし給ひし給ひし給ひし給ひし給ひし
らうちあつせし給ひし給ひし給ひし給ひし給ひし
あるたのまや由申乃し給ひし給ひし給ひし給ひし
うや御病^{御病}申さる下^下執^執りし給ひし給ひし給ひし給ひし
この民^民ア^ア乃^乃致^致給ひし給ひし給ひし給ひし給ひし
せめく。由申^{由申}申さるもえたきまうし給ひし給ひし給ひし給ひし
いして御病^{御病}申さるし給ひし給ひし給ひし給ひし給ひし
とおつせし給ひし給ひし給ひし給ひし給ひし給ひし
のまじし給ひし給ひし給ひし給ひし給ひし給ひし
事^事ノ^ノ由^由申^申し給ひし給ひし給ひし給ひし給ひし

御手紙なりと云うは、あつたて、おぼやかし、
病付て、一と、鯨といふ、うら、あま、て、おん、
了、う、民部は、御、孝、よ、の、さ、ま、の、さ、ま、の、
は、男子、女子、あ、ま、さ、た、さ、う、一、年、き、今、ゆ、方、と、大、和、高、
階、成、忠、乃、ゆ、の、由、女、ち、の、ま、後、世、さ、る、二、位、と、了、う、
ゆ、り、一、さ、そ、積、善、の、依、止、日、ま、の、入、道、成、の、さ、ま、ゆ、り、
一、い、と、め、つ、う、あ、り、一、こ、さ、う、お、う、れ、さ、う、お、男、君、三、
和、女、君、四、和、お、う、一、ま、さ、大、姫、君、と、一、条、院、乃、十一、
て、由、え、賤、せ、被、給、ゆ、一、し、す、ま、そ、ま、の、被、給、ひ、を、
お、め、そ、ま、の、一、此、六月、一日、^{ヤシタ}后、一、と、せ、た、ま、お、
申、ま、と、ま、さ、ゆ、と、関、白、成、申、し、う、被、さ、せ、給、ひ、て、後、は、
お、と、と、乃、と、一、人、女、見、と、一、人、う、と、ま、そ、ま、う、被、給、ひ、
申、ま、。女、ま、ち、入、乃、后、此、一、和、女、と、一、三、条、の、お、う、一、ま、
す、女、二、条、と、九、条、の、ま、く、う、被、か、さ、せ、給、ひ、の、ま、。男、親、王、御、
口、の、ま、敷、康、親、王、と、一、そ、ま、一、う、ま、ひ、く、御、思、た、ら、
む、と、世、の、ま、う、被、お、が、一、た、の、げ、き、そ、う、被、給、ひ、の、ま、。由、
一、廿、九、と、そ、あ、ま、由、一、う、と、厚、の、せ、給、ひ、一、う、を、冷、泉、
院、乃、之、ま、達、さ、る、の、厚、一、う、被、お、り、一、ま、ま、由、一、う、を、い、
と、由、ま、い、も、ま、う、一、う、や、の、人、お、ひ、お、さ、ま、一、由、
さ、え、い、一、う、一、う、一、由、一、う、も、お、め、で、ま、く、を、お、え、
一、ま、一、一、ゆ、と、の、ま、れ、由、母、后、の、ま、お、れ、ゆ、と、
三、条、院、の、ま、ま、一、と、一、お、う、乃、冷、泉、^{けいせん}院、と、て、い、ま、

張一重入りし法師して
思ひ存せんみくら
めけく今乃皇座より
大和宣旨
て沖流るもされを
あふとりてを
しくそてあ
うはゆるま
うあおのあ
あめたるはな
のたまはる

七女はわらの序代
あふり事
はりのふね
のこあ
やうま
てそ
めくま
優下
帥殿の
よの中

右の右君へ。は忠度の直社。是れより系。わく
出雲権守。ある。但馬。了。り。おんせ。 申。候。公
御。給。ひ。 あり。は。殿。の。り。給。ひ。て。す。の。申。候。公
よ。ち。あ。り。又。無。於。る。て。う。い。き。あ。え。さ。せ。 ぐ。ろ。も
も。い。う。な。ま。い。お。お。し。す。世。人。は。わ。い。し。れ
給。入。り。あ。い。ん。く。乃。中。藤。の。り。て。亭。す。ま。い
を。お。り。され。る。あ。る。う。歩。給。ふ。り。 是。は。殿。候。は
う。ま。ま。の。給。ひ。も。む。ま。ふ。く。あ。い。す。る。う。い
と。く。殿。の。直。事。の。ま。ま。ら。歩。給。ひ。く。は。物。波。お
ま。あ。り。あ。る。う。む。い。せ。い。は。ま。の。ま。ま。事。を
い。か。む。こと。世。間。は。い。ひ。ゆ。を。ま。は。り。す。ま

あ。り。で。お。り。い。ん。は。ま。い。は。の。あ。り。事。な
ま。富。有。の。事。一。言。を。も。く。く。く。ゆ。い。す
一。く。は。直。社。の。り。て。参。り。や。天。道。も。は。給。ふ
ら。ん。た。り。う。き。事。ま。め。や。の。給。入。り。い
中。く。は。わ。い。て。ま。い。ん。か。ら。く。 是。は。殿。候。あり。え。い。と
そ。後。の。給。ひ。を。れ。も。ま。い。の。殿。は。た。い。す。ま。い。と。や
う。い。え。お。お。せ。い。給。ひ。は。申。候。す。は。申。候。す。り。や。ま。い
さ。給。給。ひ。ま。い。これ。中。納。言。候。も。う。い。み。え。さ。り。か。く
ま。か。い。の。わ。い。て。い。う。あ。る。ま。い。給。ひ。く。い。い。か
海。の。ま。い。は。 是。は。殿。候。事。な。ま。い。の。ま。い。入。道
殿。の。直。社。の。り。て。直。事。あ。る。ま。い。は。の。ま。い。候。中

家と社つらきものも志中して云ふ

券せしめしは皆責せしめ給ひき。種村と壹

波守のちのこれも子も大宰監よりしるはなるを治る

り。は種村の純友のちのしるはなるのしるは

なり。は純友の將門同心のちのしるはなるのしるは

くつそにるものなり。将門のしるはなるのしるは

まうんといひ。まうんといひ。関白のしるはなるのしるは

と申して。あの世界は我の政と。君と申すすげん

との事と申す。今でひるはなるのしるはなるのしるは

その西國海よりしるはなるのしるはなるのしるは

ぞ水の上はち成りしるはなるのしるはなるのしるは

田代はらりす。またがらあれしるはなるのしるは

海にちなるを。海にちなるを。海にちなるを。海にちなるを

まをまうんといひ。まをまうんといひ。まをまうんといひ

人のしるはなるのしるはなるのしるはなるのしるは

つらむと申す。つらむと申す。つらむと申す。つらむと申す

壹波對馬れ人といひ。おん。夷國のしるはなるのしるは

よし。ちのしるはなるのしるはなるのしるはなるのしるは

て。しるはなるのしるはなるのしるはなるのしるは

よし。つらむと申す。つらむと申す。つらむと申す。つらむと申す

あ。しるはなるのしるはなるのしるはなるのしるは

しるはなるのしるはなるのしるはなるのしるは

しるはなるのしるはなるのしるはなるのしるは

かの西のいかにうたへてさうしてくくくく
 をまじれ給へりなればありとてはなほなほとて
 まじけ敷父おとこれいともよと清教なごふたわを
 してわのふおとつあもくはなほもあま海して
 ともしなほもなほもなほもなほもなほも
 ろけと興くわんえしあうびとほあるべを給なごわを
 ぬの花山院をな我しすしあうしとてまうりて
 まだれを関白候もゆぐの勢給なごせとらなほ
 なのりよりこの清事なごやとあうしとて
 半とえはのえし我は度け入道敷なごらうの如か法
 こそ者しまうなほひきとらうもなほらうし

大鏡卷之第七目錄

太政大臣 道長

● 鎌足 — 不比等 — 房前 — 真楯 — 内膳

冬嗣 — 長良 — 基經 — 忠平 — 師輔

兼家 — 道長

一太政大臣道長おとく法興院おとく御五男おとく母後
四位上おとく攝津守右京大夫及藤原中おとく五位女おとく
不おとく此おとく親長おとく二位中納言山陰おとく緋七男おとくなりおとく此おとく道長
大臣おとく今入道おとく下おとくあれおとくたおとくもおとく一おとく條おとく院おとく三おとく條
院おとくのおとく正おとく代おとく東宮おとく乃おとく西おとく御おとくちおとくりおとくておとくおおとくりおとくまたおとく此
殿宰相おとく了おとくはおとくたりおとく終おとくるおとくておとく永延二年正月廿九日おとく樟おとく
御言おとく又おとくたおとく終おとくるおとくはおとくたおとくりおとく廿三おとくのおとくとおとく上おとく東おとく門おとく院おとく生
斗おとく三おとく後おとく終おとく正曆二年九月七日大納言おとくるおとく也おとく終おとく
正曆三年四月廿七日おとく後おとく二位おとく終おとく中おとく左おとく右おとく大夫おとくとおとく
申おとく一おとく法おとくとおとく廿七おとく字おとく宿おとく殿おとくむおとくまれおとく終おとくるおとくはおとくたおとくり
長湮元年己未四月廿七日おとく右おとく近おとく衛おとく大おとく將おとくけおとくとおとく終おとくるおとく

其より此まへよりなほ申さるゝあてさうがしなり
まゝのよきよきとていふにぞもあがり平らりり
まのりも大長公におわくう後路ひりしは南へ
五位の御位はりよきやい志なりしはまろくは
へるるまゝの御旨す用院大納言夏三月廿八日中
白殿四月六日お家一後路て十日うせ路ひぬるまは
よのえよはなむらうしはまはぬぬおるしは
あま後路するし事あるもし一条大將海時を
月廿三日う後路し大長公大長公長官信重同右大臣
后道宗批用源中納言保光のよの三人を五月八日
度よりせ路し出陣大納言殿をみちよりと申し

六月十一日そりしは年二十五うそりしありあり
そのよよふせりく大長公の七八人二三月れちより
しはひうせ路しは事うなむらうしはまはぬぬ
まゝの入道殿の御幸れうしは路しはよそを
あめまはれ殿をう後路のまのひきしはまはぬぬ
いしはひうせ路しは事うなむらうしはまはぬぬ
つるしはひうせ路しは事うなむらうしはまはぬぬ
まのりも大長公におわくう後路ひりしは南へ
五位の御位はりよきやい志なりしはまろくは
へるるまゝの御旨す用院大納言夏三月廿八日中
白殿四月六日お家一後路て十日うせ路ひぬるまは
よのえよはなむらうしはまはぬぬおるしは
あま後路するし事あるもし一条大將海時を
月廿三日う後路し大長公大長公長官信重同右大臣
后道宗批用源中納言保光のよの三人を五月八日
度よりせ路し出陣大納言殿をみちよりと申し

とをばけけとさんと也中一乃女君と一条院乃所討
長保元年十一月一日御り十二よそ女はままつ
後路のちとふる長保二年の八月廿五日
十三よそ女はままつせ路ひく申交とり
うちつたれとみこ二人うんを重路ひく
今乃見ると東交よおと
皇太后交とめて天下を二乃とておつ
そのはこつきの女君内侍のちと申
東交よたろへ
よけつ後路ひく
ちろ後路ひく申交と申き四年十九はて又の
長和二年三月のちと申
せ路ひく今よたろへ
しはせ路ひく
交るす
后二和たろへ
肉のれ
のえひま
いの路ひて
申すはれ
たる

ま宣言ありき使ら源氏初に後賢の君ぞ一子孫を
一中ま交下りてむむとせしは一子孫に
るゆふのまきと今此才まをりてうちよむ
ます又所はの女君をりまて田代のくこ十はよむ
一留まよりの東ま十三する智孫よしは安
元年二月一日まの孫孫ひく春宮女御もそま
を孫孫よむとくでんよぞたりしゆとよの入道
一の孫ひく娘のまままといの園白女乃は女
けづけたくまうりてとままの孫孫ひり今
年ハ十九もぞるを孫孫^丸ト孫ひて七八月も孫
あて孫孫の家入道殿乃はありま海へてま
よりあまのこのまそおりままこのおま
らふまもあまらゆるとあまをた
けひりりおりかむし女君乃はありて
くれごり男君二あま今園白女大長孫通
乃はまとまて天をりまにま
くらりまの孫孫一まあま内大臣孫政よむ
孫ひくんんをまけま孫ひく六寛仁三年
十二月廿二日孫政の表たてまの孫孫ひてお
園白の宣言りて園白もくらりまの孫孫
細言るまの孫孫ひりまの孫孫ひり
り今乃のまありまの孫孫ひりまの孫孫ひり

是と云居殿と申わらるるをいふに今一布を
きとりの内大長とてたておけりて教通のたゞと
まゝと申すも此一人とてたゞと申すありと申す
二条殿はとていふとや君切れたるはさしひある
ふりとの必おきつめとて後路に東宮北后母后と
ら後路ふあらはははあやの一人とておとすに
を御子とせられ路にぞとておはは後路あり女の
御さしひを店とせまゝとてたゞと申すはゆるる
申されとて申すはとておとけはとて申すは
さしひあるあまことおとけゆるるはゆるる
後路にたらんやわめとて女言たりをいふとて
よはうせとて申すはとて申すはとて申すは
たしとて申すはとて申すはとて申すはとて申すは
るすはとて申すはとて申すはとて申すはとて申すは
とて申すはとて申すはとて申すはとて申すはとて申すは
はとて申すはとて申すはとて申すはとて申すはとて申すは
おとて申すはとて申すはとて申すはとて申すはとて申すは
たとて申すはとて申すはとて申すはとて申すはとて申すは
すはとて申すはとて申すはとて申すはとて申すはとて申すは
たとて申すはとて申すはとて申すはとて申すはとて申すは
後路にとて申すはとて申すはとて申すはとて申すはとて申すは
東宮女御内白老大臣の御母とて申すはとて申すはとて申すは

さ波路しん志ん人きましくさ波女房さうひけり
んをひとやそ魚ちよあちちてさ波路むてひめま
なまのれちしほさやししんくしうさりるくおのむ
しつきだあくさ波路ひしんをほせうとの破り
我しくとけさしんを中路ひくれど后のしん
せりやまを路ひくしんの入道殿とぞおしん
えさせ路ひくれどかひしんをせ新神一程し女房二
不男君四市おしんかひんりし女君としんかま
山一条院の女御今しんを中務の女房平親ま
中村上の七れんをにおしんをそのは男君二後中
将師房君とりけしんを男白虎の魚のほりし
なるゆへは男白虎むしんをさしんをさしん
んえぬしんをさしんをさしんをさしん
なるしんをさしんをさしんをさしん
むしんをさしんをさしんをさしん
こをさしんをさしんをさしんをさしん
史能何とやゆ今しんを中務の女房さしんをさしん
今しんを馬頭とて頭信とておしんをさしんをさしん
君るりさわ元年壬子正月十九日入道し路ひさお
の十余年佛乃どしんをさしんをさしんをさしん
しんをさしんをさしんをさしんをさしん
魚しんをさしんをさしんをさしんをさしん

今更なるより一これぞめでたき事佛に
死せ給ひて日が正と死んものちれよあつておとせ
びくは井のおとく人くひりたれ佛はなる皆
給らんもうきかかひりては後たまひられた
まうんもおおえは平と今れあつていりのいり
事なりよのえうしあましたうもせを侍や
しめ我がつらうとやと我物しつらひ給
ひらんげよと事なるや道心あつらん人を後の
よのよぞも志あるきつらる言和殿の正あよた志
ふの信がしつらうとありそを問ひては後給よ
とほらんト守給とあつて後そはまうんゆあ
なりたることおひひとてちうと後いのりうとを
もまうりたれとあせられたるまをきき
てはうしをろと後給ひて顔てそを教ふのり給
給ひけらよかえ川とあつてあどのらうとてはめ
くれおえしなんすしあはれるやう今らや
うもてあつてあつとたおひあつとてをた
あせられし今この信にうとてよの正の君さか
家の相うたれとすれとの給ひて申たまはる人
よはせしそまをえと後給ひたれとまをらうあ
人をさしうとて後よはたまはるはとりて
はま給ふなり正月よりちうりそ給ひてま

清川曾馬類のおふりさういぞきまりつるしそむをに
あふれ相ちくたうりておんくつ事いんけい
のふすひたれだて頭中將十九りて世なるを路あり
と申路ひたれだてさふふさうぞー路つんとあり
なるふまへくとさうとくさうまおふものたよひたれ
相なるしひとどお人おものよるん路ふり入道教を
やまかへいんさうたふさやわいせいーんさうせん
もうれいふたよひいんおー結解あひたうりつるよれさ
たくてたあさんとおおむーいんごよさこーいんだ
こうあせとておんかじさふられ結解あひたうり
とそるーさよえ路ひさ受戒はけやうそあれわうて
路ふ人くろよれせしとほまぬまの路ひくい
とこそれけりけりさ威儀さうかえもあぬら
どもたて路路くさうしんさうさうさうさうさう
やむ事るさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうのさうさうさうさうさうさうさうさう
入道教えささうさうさうさうさうさうさう
かあさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
やうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

九より後よりけり後孫ひふりてはと一み千一
て孫政とさせ孫ふと一とつゆ力い太政大臣よな
後孫ひ孫政とせむの国白ねとてはゆづりな
けひとては年五十四よなとせ孫ふ寛仁三年にちの
とのむつと二月十八日兼中なるりもとひひま
孫政ひとてはと一はたつ一ままひとてはと
一の一せん徳よ女一はたつ一の財なるり
たき力を孫政ひとてはとつゆ力い太政大臣よな
あるかきよは布袴とてと一うとせ孫ひてはと一
めさばたふふ事ふと一と国白ねとてはと一
とおひ一めすふあんでんのや一はたつ一はと一
孫ひと南よむきてとてはと一せん徳よ女一はたつ一

いとゆりて孫政ひなるりとつゆ力い太政大臣よな
き法師一とてはと一おろと孫政ひ肉白殿とてはと
めと一とてきんぶら殿とてはと一とてはと一
たつ一とせとてはと一とつゆ力い太政大臣よな
事あるとてはと一とてはと一とてはと一
孫政ひとてはと一とてはと一とてはと一
戒の師一とてはと一とてはと一とてはと一
とてはと一とてはと一とてはと一とてはと一
きと一とてはと一とてはと一とてはと一
ちりのと一とてはと一とてはと一とてはと一

せうち東宮のちやまらむとてしめしむる御孫ひ
 きぬきけをせ給ひ馬にやまらむはくはくはむの
 るらむとてしめしむる御孫ひ
 くらふ一条院とてせ給ひ馬のとてしめしむる
 のけおらむとてしめしむる御孫ひ
 臨ひくくそらおらむとてしめしむる御孫ひ
 下りてまらむとてしめしむる御孫ひ
 めでし給はありとてしめしむる御孫ひ
 まらむとてしめしむる御孫ひ
 とひとら馬車よとぞわらむとてしめしむる御孫ひ
 ありとてしめしむる御孫ひ
 たりおるべきとてしめしむる御孫ひ
 下りてまらむとてしめしむる御孫ひ
 もおらむとてしめしむる御孫ひ
 る身をもとまらむとてしめしむる御孫ひ
 又おらむとてしめしむる御孫ひ
 年寄えき御孫ひ三人后園白た大内大臣ありとてしめしむる御孫ひ
 言のほちくはくとてしめしむる御孫ひ
 ちやまらむとてしめしむる御孫ひ
 せむらむとてしめしむる御孫ひ
 そんやめむらむとてしめしむる御孫ひ

でうくゆびんずらんむるこもよふおんき事ある
大信北直ひまめ三人后とてきしなむく奉ら後孫よ
事あるまのむらりのあもりもろこよよいひ
一子人の后たしりれども事にはちもまづの
くきとがしらありこまこゆもよとあまの國まで
えひひとてその中よまよひまじと現るあまの
とよめ現まをそりあき事あり王姫君の
かし路のそて胡のくふの人とるまよ陽人を揚ぎ死
よまどめくれは門はらくなまようてまはれむ
きはれむも事をもあまじとて十あよまより
てあまよあまらりるむなれたこま人のあひる
こら國のけなしれ后てそむ千人くれと代り
軍人をきそ路ふこめ入道殿下のひらりごとをりて
れ本皇太后宮皇太后文申文の初おれしこれまよ
とふまよしく北直さいとひなり皇太后宮一人のえ
しそはははらひるれ路くまといんともそれと自信
云御を多よおをしませむろまよとぞ人とねのむ
やんき事りてもあもあまをよのあつあめとの
はひりるるる事なまのまよとけはうま路
むよしとまよとまよと三人乃后のこしそひのおお
しそめあまよもまよとあそだせもあまよひる
と后為やある人丸ころのむらひとらん人まよ

てねのひよしきりかんとしてお月くゆき春目
新幸はさだの一条院の正時よりほづもまゝぞり
ろまもやくおさるくおりませどそりるす
あまき事よてそまるとまひよなりあ
ゆだち交はあしよひやまを路ひくおりま
よのたひなすとの清おりちてうちそひは
くあつて数路も度乃出ありと後ほくそちるどす
ーまうあまよまおりまはあま事
やまありまうしるおるせういりま直せん
きくふんそてまうりくくあてんアんや
つれどるあやといひるまふたりま

佛とらそてまうりきとんあまひいよひとあて
てれごまもあま海あつらなるたまのあつたの
はあまはあつこの程まはよとんて路ひくら
をくりよなまを造ひぬる人をけりけり正すまは
まらくとそまてくーまあまあつらありあま
まらま。おあまき海ありまはまは人の見
まをまうらんまをまはまやあがりかんあ
あまよ。おく神はあを路くまを路くと
まうれゆるは殿ちま

うれらまののりあまの
あま

御う魚一

くもりのなきよのむらりよや春日野乃
ねるーみちふもたつひゆらむ

あうよやあまを渡路ふりとのあふくときあえ
てめとなくゆりーなりふもちま乃あそりー
見ふ山乃てそまろあいなそのうん

ゆききみゆさのゆききうー

あまーぞをあきるどが心のまよまぬよやあがりく
よかぞりれ秀弁えさうーうれいふとりてあ
春日明神のよませ路くまけあとおひえゆり
あう路まーとも乃うあまうきよてあー
一条院のゆ

あふも大入道殿のゆ幸申まこるあまを渡路ひまうり
やーそんそく礼ゆきあお月こまひひあうー
あうん人のあまのみちぞれ路ひつらんあまのー
まなくやゆーまーはるたれゆーまふあー
あうれあまあまあまあまあまあまあまあま
ひーあまのあまあまあまあまあまあまあま

あうーりーちさりのきーあまあま

あうあうーあまあま

又これーあまあまあまあまあまあまあまあま
ーあまの目大まやせあまあまあまあまあま
まをあまあまあまあまあまあまあまあま

たむひよとくかたもはゆいぬちのあひしむあは

をよきやうにうき一たむひよあひのい

あひあひあひあひあひあひあひあひあひ

やめをそけしたまはるしとてふしとてふしと

第大細言のうけなふしゆもささるれめづら

一またと大入道教いそをのぞんしやま

あふれさう子ともれびいふあひづらもあひ

しそくられかれともいせあひひききたる中国白

あひし教るどはきふまもあひあひあひあひ

あひあひあひあひあひあひあひあひあひ

のたいとわううあひあひあひあひあひあひ

はひあひあひあひあひあひあひあひあひ

アそさあひあひあひあひあひあひあひあひ

あひあひあひあひあひあひあひあひあひ

あひあひあひあひあひあひあひあひあひ

あひあひあひあひあひあひあひあひあひ

あひあひあひあひあひあひあひあひあひ

あひあひあひあひあひあひあひあひあひ

あひあひあひあひあひあひあひあひあひ

あひあひあひあひあひあひあひあひあひ

ゆきしをものかしてとらんとしんさ
死んとするよむらひもんやとおやせられ
えあうとどののちひたるは入道殿
いしつ毛ゆりあんとちひされたるお
りしものいひけりある事ありさ
をいけみちきり豊樂院道意仁壽殿えんじゆ倉龍道長
大徳殿へいけとれせしきくれたるそれ君きり
ひんちき事とせしとちひれとれとれ
いけたりるちひるよのづしはま
あくなしとおやたるよはめさふは
きりたるの候者とらぐけりしあの陳の者
よまねたきりあふゆき一人昭慶門ま
とちひせし事とらむらむらむらむら
いんがあ證あたるふとちひせしあれたま
てはてしこととらむらむらむらむら
ちひしとらむらむらむらむらむら
福よとらむらむらむらむらむら
ちひあむらむらむらむらむらむら
道長の兼明門よりあむらむらむら
ちひむらむらむらむらむらむら
ておひむらむらむらむらむらむら
むらむらむらむらむらむらむら

るむらむらむらむらむらむら

その一の 妙女院の法門法一と 飯室持僧の法門
り 師一は 僧一を 相人の 寺一と 女房一と 師一の 心
て 相せられ けり 所一に 師一の 内一の 大炊殿一といふ 相一に
歌一といふ 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と
その 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と
て 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と
の 相一と 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と
う 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と
ら 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と
お 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と
ぬ 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と

なる 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と
中 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と
と 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と
る 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と
か 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と
々 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と
と 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と
子 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と
師 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と
る 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と
を 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と 師一の 心一と

るりけるんまうらめてたりしせ路が事やわらう
ますめの事だたしくは居申すやうにあり路
りしはしりるがめりいふら
れちぬまゝとよめうあやうのあちきりや
なるめぞきしりしやあうれそくおあうこ
とるれあせしはあたるはくちらあごいさふ
なりきれひりぞとくうい今めさ中あも二条
院の時のおあはし事のいゆきれ事乃あうよ
あやうしはひり人の神代をうてはあは
きりしを路しきりあうありあうれ
あやうしとてうちらうい路路か
はいあめくそくたう一師くものうかう急
あうのあきふゆひとくける井のあやう
あはひよあいのうもてあやれくえし
れらうしよのうあう名あなうい
らうあやうあめありあはれう
あうのあやうい二条院は其の事とて
れほりめいそあうまのあまひ
ちあもあはれ事れあのあうそあ
あはれあういあはれよあはれあ
あはれあういあはれよあはれあ
あはれあういあはれよあはれあ
あはれあういあはれよあはれあ

くはあはれあういあはれよあはれあ

毛打舟一をりんよも 船路くむせあ
いそりは院をあらふふおひの中を船路いま
なりふもきくし中を船路くしそ六報一そま
けりまうし船路ひしは舟と入しそけし船
ひくし中国白船ありし處らうしそし船をせ路ひ
て入道教よまうし一船ははまもむひの世中か
しそしそむせゆかしそしそむしそあうしそ
は志里ゆらび船をあらうて船をむせあゆら
ぬよのやうしそしそあうしそ六人の貞信公小野
宮をむしそめまそまうしそ十年とおひしそ
しそは船のしそ入道教しそしそあひしそ

よしそか船しそしそをせらるしそはあひしそ
あむらろむ路ひしそしそれしそめしそ
しそぐあむらろむあしそしそれしそあむらろむ
しそ人しそ船しそあしそしそあむらろむしそ
中をしそなりしその中しそしそ船の代せ代しそ
しそしそ船をせらるしそしそはしそしそしそ
あしそ船しそ考徳しそしそは代しそしそしそしそ
大信しそしそ船しそあしそしそしそはしそしそ
しそしそしそしそしそしそしそしそしそしそ
しそしそしそしそしそしそしそしそしそしそ
あしそ船しそしそしそしそしそしそしそしそしそ

とてこの後をいひてんとかしむるさゆふか
家やいふ心むくもあまうりぞむるゆゑや御子大
臣不比等のかとていふ実を天智天皇のは子なりとれど
の御子の御とれに高より路入りこゝろあひま
れし御子の御名の御よりはまゝめとてなりてあり
たまふる名もあまの御はゆゑありけり不比等の大
臣の御名とて君をいひて人をいひける太師の武智丸
とまゝいひてた大君までなる路入り二帝房崎や
申して奉相まであり路入りおれふ比おの大長は御む
すめ二人たてしをいひて一をいひて聖武天皇の御とていひえ

の御名とて申ける今一は御名を聖武天皇の御
女御なりて女御子とていひて路入りをいひ女御子と
聖武天皇の女御は比をいひて路入りけり女御子と
高祖女御とて申して二度位はけり路入りけり
ふら削の御名とていひていひて不比等乃大長男
子とていひていひていひていひていひていひていひて
とて高祖乃大長女御とていひて南家と名付二帝房崎と
いひて高祖乃大長女御とていひていひていひていひて
けりそのとていひていひていひていひていひていひて
ていひていひていひていひていひていひていひていひて
いひていひていひていひていひていひていひていひて

して終ひては久たう海ありあまの家の
はあしやふえむらうり終てそのはしをいふ
一すむらうりやあまのたえむらうり申す人
かゝる福をいふもいふのつゝそのはしをいふや
ゆらん花かまゝのたえむらうりはつゝさむらの國
白殿まで十三代よやあまの終つらんそのたえむらうり
らゝめ終つらんやせむらうりあまのたえむらうり
たりとが人をたえむらうりはあまのたえむらうり
あるとてはいとありかゝる事なむら

一内大臣鎌足大臣藤原姓賜り終ひてあまの
十月十六日終つらんやあまのたえむらうり
廿五年は終つてくゝる代をて紀乃氏の人のいひはむ
あまのたえむらうりはあまのたえむらうり
うせむらうりはあまのたえむらうり
あり終つらんや

- 一 鎌足大臣次郎藤原正一位不比等大臣御年六
- 二 養老四年八月二日終つらんやあまのたえむらうり
贈太政大臣よるゝ終つらんやあまのたえむらうり
元正天皇御養老天皇二代あまのたえむらうり
- 一 不比等大臣次郎藤原正一位不比等大臣御年六
- 二 養老四年八月二日終つらんやあまのたえむらうり
贈太政大臣よるゝ終つらんやあまのたえむらうり
元正天皇御養老天皇二代あまのたえむらうり

九年四月十七日より後略ひしり

一 房前松くく宰相四男志指大納言輝徳天皇は正時
天皇神護二年三月十六日より後略ひしり
御よりく七年 海中御年十二日
くせりせとあり

一 真指大納言二部右大臣後二位右近衛大納言因磨大臣
御年五十七より後略ひしり
位右大臣桓武天皇平城天皇二代より後略ひしり

一 因磨大臣乃左衛門冬嗣大臣乃右大臣より後略ひしり
御り贈大政大臣この後より後略ひしり
をより後略ひしり

一 冬嗣大臣乃左衛門長良の納言冬贈大政大臣より
なる後略ひしり
御中書より後略ひしり
むぎふんがきくあり後略ひしり
まゝく大臣より後略ひしり
るんさきより後略ひしり
て後略ひしり
よその後略ひしり
あひ後略ひしり
くより後略ひしり
むぎ後略ひしり
をより後略ひしり

とよや人しくやまめり あかしは源氏の国は長長長長日の子ら
十一人かきあひのたりとあり

一 長良大長正之節 基經 正とくふ太政大臣まてあり
たもふ

一 基經 大長正節 忠平 おとくふ太政大臣まて成経ふ

一 忠平 大長正節 師輔 大長右大臣まてなる経ふ

一 師輔 大長正節 兼家 大長太政大臣まて成経ふ

一 兼家 大長正節 道長 大長太政大臣まてなる経ふ

一 道長 大長正節 孝子 今内閣白大臣 頼通 乃経ふ

これより経ふ一節をば後乃経ふなりとあり一節

より経ふとあり一節をば後乃経ふなりとあり

少き経ふとあり一節をば後乃経ふなりとあり

事なまてとされたりとありむとありとあり

る所た無滞滞る人なりとありとありとあり

さる一なりとありとありとありとありとあり

ひのひをば後乃経ふなりとありとありとあり

りとの一なりとありとありとありとありとあり

たりとありとありとありとありとありとあり

なりとありとありとありとありとありとあり

うきとありとありとありとありとありとあり

んてとありとありとありとありとありとあり

とありとありとありとありとありとありとあり

なりとありとありとありとありとありとあり

此を以て一宗院の時よりおぼやけまうりしものなり
 なるを又鎌足大臣の法成寺大如王多武峯より傳へしめ
 路のくろくふ正貴と称せし先路のくろくふの時をこ
 ちひなを路ふ正貴と大臣名山階寺と建之て先
 路のくろくふよりこのちひなを路ふといのち申り
 このみてくろくふびよるを正貴春日大原野を回しよま
 けりたごひあやしき事いそよめしごとく正寺の僧
 稱宣れはあやしき事いそよめしと申てそのとき藤原氏長
 者殿よりせしめ路ふはつとてあまのくろくふの
 甲路ふ路ふしちのくろくふ正物忌と稱し、一の正
 よりくろくふしめ路ふおぼしむるはくろくふよりて
 とくしよ三三夜會法をこるるは正月八日より十日ま
 で八者おこなふめくろくふ僧と講師とては師會とてか
 こめおぼやけりしめ路ふの處よりてくろくふ路
 小まの二月七日よりくろくふとて十三日午を薬師寺より
 て最勝會七日又山階寺より十月十日より維摩會七
 日なるを正ししれをくろくふと稱し、くろくふ路ふ南京
 法成の三舍法師よりて正は已講とあつてその志し
 りをけりしく法師僧總よたるかかれは後正といふ先
 しめくろくふと稱し、くろくふよりてくろくふ路ふ
 山階寺よりてくろくふは又くろくふと稱し、くろくふ

一 太政大臣冬嗣乃おとくは皇太后順子の法父文徳天皇の正祖父

一 太政大臣良房乃おとくは皇太后宮明子の法父清和天皇の正おとち

一 贈太政大臣長良此おとくは皇太后宮文子清父陽成天皇の正祖父

一 贈太政大臣德继乃おとくは皇太后宮澤子父光孝天皇乃法おとち

一 内大臣高着おとくは皇太后宮汎子父醍醐天皇乃法おとち

一 太政大臣基経のれおとくは皇太后宮穗子父朱雀天皇并村上帝乃正祖父

一 右大臣師輔乃おとくは皇太后宮安子父冷泉院并圓融院正祖父

一 太政大臣伊弉此おとくは皇太后宮文懐子父花山院并正祖父

一 太政大臣兼家乃おとくは皇太后宮文倫子并贈后父一第天皇并三条天皇正祖父

一 太政大臣道長おとくは皇太后宮文彰子并上東門院皇太后宮妍子中宮盛子尚侍嬪子なる乃此法皇所

御父苗代并喜文の祖父よれおとくは皇太后宮文彰子の御中子后三人おとくは皇太后宮文彰子の御中子后三人おとくは皇太后宮文彰子の御中

入道教より仰よきおえさを終りてめり園自虎大臣大納
言二人中細言の直おやしてたうしとんさるもやきこし
めあつたんよ日本國よは唯一無二たりしまたまづ六
律くしめ終つる正書なとのありさ海嶺足乃たうと
乃多武率不比等大臣乃山階与菩提のたうと此扱系
寺忠平のおしと此法付る九条教禰嚴院あめれみりや
の所より終る東大寺に佛をりてうへおわさう
たうしとんさるもやきこしとんさるもやきこしとんさるも
をまうてよのちしとんさるもやきこしとんさるもやきこし
率天の一院と天竺乃祇園精舎しとんさるもやきこしとんさるも
竺れ祇園を精舎とんさるもやきこしとんさるもやきこしとんさるも
くりともうしとんさるもやきこしとんさるもやきこしとんさるも
くろきしめ終るもやきこしとんさるもやきこしとんさるもやきこし
無量壽院もやきこしとんさるもやきこしとんさるもやきこしとんさるも
もやきこしとんさるもやきこしとんさるもやきこしとんさるもやきこし
たもやきこしとんさるもやきこしとんさるもやきこしとんさるもやきこし
徳太子臣もやきこしとんさるもやきこしとんさるもやきこしとんさるも
まよきこしとんさるもやきこしとんさるもやきこしとんさるもやきこし
たもやきこしとんさるもやきこしとんさるもやきこしとんさるもやきこし
あうもやきこしとんさるもやきこしとんさるもやきこしとんさるもやきこし
よおりもやきこしとんさるもやきこしとんさるもやきこしとんさるもやきこし
大月よなるもやきこしとんさるもやきこしとんさるもやきこしとんさるもやきこし

ふつふつあううーお薬寺はあざれき御ふよいらん
おひーめーうーお路ひかんさるるきりてはつめ
おちあきあくおらうーあす人くもあせしれけ
よーうらひゆりけえおあむじとめくるあおたきひて
御臺たぐさおれらうーあひは車よ真信云といとち
いさうてきーたてまつり路ひけるふ法性ちあ
あふらり路ひさうてあふさうよたさうと
らんちめさあうよたさうさお路ひりーときさ
お路ひけるふいふかんくあくらんとおれえん
さーいごーあらんまわを酒さふいさうくかん一
まをいさあさめーいさうてうかんかんさうさ
らんあめーおれーめーさあふいさうさ

たありやーたうささそよまれのあうくお事
あうーうさおさうさらんさうそりさお路ひ
さあにさ法性さはささお路ひーなりあさ
あひひむられ事なまはらうあうさう大信法
席よのりお路ひーはまもはさけさまもさう
ゆりさあさうれさうもさうかん路ひれどちさ
入道あふさすれめけいさお路ひと天地さうさ
ささお路ひあうあああうねさうさお路ひゆ
ささお路ひあうさうさうさうさうさうさ
とあさうさうさうさうさうさうさうさうさ

約きどげらうのばいなきふらいつき乃はそもど
屋めきどいらとものほすとよす約のうけあ
とよふめてとせと後路のまねたもやあいらき
た中ふすののほひとくさのよやほいらき
たゆえ作とすともぎのそり物れとまあとのほ
まぬうあきのめ成ぬいの一急のそくれき
あやうらえれとらとてんはびととやしくれ
と後路のてとどまたと中うと後路のまねたも
人中一大家のゆと人をまのあまのまのらま
ゆる一息大店をそりてうと製菓の後の大教
よりとせと後路のまねたもとととととのまを
りきなどせしれきとととととととととととと
とととととととととととととととととととと
市の製菓のれとととととととととととととと
まうとあいつと約とととととととととととと
かきとととととととととととととととととと
とととととととととととととととととととと
史乳母中將乳母ととととととととととととと
よりとととととととととととととととととと
てまうととととととととととととととととと
た々よらとととととととととととととととと
りすふととととととととととととととととと

かきかすれ事うらおひほだけかせをむりか
おどろきたるし事あはれおほえほれるぞんう
あげさうし事いぞおほれくしきし
まゆとまおほれよとふほえおほく見さしほきと
なほしうきし事君よをくれ奉りおりのあは
まのあきし事おほひのあはれおりのあはれ
月十日あきの事よるしきおほしきそあはれ
しきし事あきと思ひゆりし物うかしてあは
びくろんくえをいひやういし事おほひのあ
まおほしきうらおほしきうらそらうらた
たしきし事あきとふおほくし物まをらうら
おほしき事あきとふおほくし物まをらうら
久れしき事あきとふおほくし物まをらうら
物まをらうらとふおほくし物まをらうら
生せしき事あきとふおほくし物まをらうら
れしき事あきとふおほくし物まをらうら
おほしき事あきとふおほくし物まをらうら
るまゆらうらとふおほくし物まをらうら
まねれしき事あきとふおほくし物まをらうら
よれしき事あきとふおほくし物まをらうら
なきしき事あきとふおほくし物まをらうら
かてんしき事あきとふおほくし物まをらうら

かきかすれ事うらおひほだけかせをむりか
おどろきたるし事あはれおほえほれるぞんう
あげさうし事いぞおほれくしきし
まゆとまおほれよとふほえおほく見さしほきと
なほしうきし事君よをくれ奉りおりのあは
まのあきし事おほひのあはれおりのあはれ
月十日あきの事よるしきおほしきそあはれ
しきし事あきと思ひゆりし物うかしてあは
びくろんくえをいひやういし事おほひのあ
まおほしきうらおほしきうらそらうらた
たしきし事あきとふおほくし物まをらうら
おほしき事あきとふおほくし物まをらうら
久れしき事あきとふおほくし物まをらうら
物まをらうらとふおほくし物まをらうら
生せしき事あきとふおほくし物まをらうら
れしき事あきとふおほくし物まをらうら
おほしき事あきとふおほくし物まをらうら
るまゆらうらとふおほくし物まをらうら
まねれしき事あきとふおほくし物まをらうら
よれしき事あきとふおほくし物まをらうら
なきしき事あきとふおほくし物まをらうら
かてんしき事あきとふおほくし物まをらうら

上様路よりことと又命ありしは御建に御座りしは
一 御きんとていしりしは御建に御座りしは
おのゝゆるし事な御院これ大文なりけりしは
上様路りんとてみしは御建に御座りしは
ありしは御建に御座りしは御建に御座りしは
皇太后宮のまよふをけいしめんと思ひゆきと其
まの御建に御座りしは御建に御座りしは
あまの路めりしは御建に御座りしは
路ひてりしは御建に御座りしは
れと紅がしあまの路めりしは御建に御座りしは
うまの路めりしは御建に御座りしは

